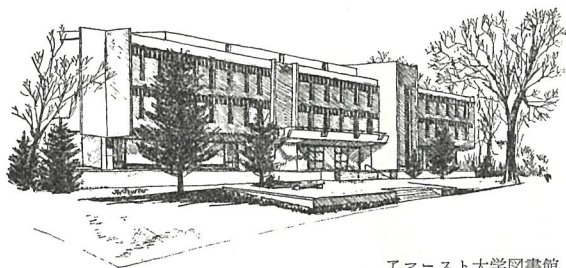


アメリカの大学図書館

——アマースト大学図書館を中心に——



アマースト大学図書館

目次

- 一、はじめに
- 二、アマースト大学図書館
- 一 建物・設備等
- 二 予算
- 三 人事
- 四 業務計画
- 五 収書
- 六 目録および整理
- 七 サークュレイション
- 三、ファイブ・カレッジ・コオペレイション
- 一 インター・ライブラリー・ローン
- 二 ハンプシャー・インター・ライブラリー・センター
- 四、目録分担システム
- 五、ナショナル・レンディング・ライブラリー
- 六、おわりに

西 田 逸 郎

一、はじめに

三月二十三日の出発から六月四日の帰国まで十週間余りの海外研修のプログラムとその内容のあらましは、およそ次のようである。

三月の末二十八日から春季休暇あけから五月末二十九日の卒業式までの間、アマースト大学のロバート・フロスト図書館で、ライブラリー・アドミニストレーションについて研修を受けた。

その間、ファイブ・カレッジ
リサーチ・ライブラリーアマースト大学および研究図書館グループ(RLG)、米国議会図書館(LOC)およびその周辺の大学図書館を訪問し、アマーストで学んだアメリカの代表的な一つの大学図書館のアドミニストレーションの実際をもとにして、アメリカ(主に東部)の図書館の現状、アドミニストレーションの方法を学んだ、ということになる。

当初の予定では、アマースト大学以外の図書館の訪問は、五月末にアマーストでの研修が終わったあとで半月余りかけてすることになっていた。しかし、たまたま、居住条件等の原因で、俗に言うギックリ腰 acute lumbar muscle spasm にかかり、重い旅行用荷物を携

行しての移動が困難となった。そのためR L G、L Cの訪問はアマースト滞在中にすまずことになった。又、周辺のファイブ・カレッジはその学年暦がアマーストとほとんどちががなく、六月に入ってから訪問したのでは、キャンパスも閑古鳥が鳴き、関係者も夏期休暇に入っており、会うべき人にも会えなくなるという事情もあり、同じようにアマースト滞在中に済ませたが、そのことはかえってよかった、と言える。というのは、アマーストで研修したことを下敷にして、他図書館で知里えたことは、再びアマーストへ持ち帰り、議論をしたり、質問したりして深めることができたからである。もし当初予定通りのスケジュールで研修がおこなわれておれば、同じ事がらについて、アマーストで聞いたことと、ハーバードで知ったことに相違があっても、二つの事項が並列して私の中に残るだけに終わったであろうと思われる。

うことが一つの大きな特徴であろう。このインター・ライブラリー・コオペレイションの考え方は、インター・ライブラリー・ローンと目録分担作業と集中保管制度によくあらわれている。

インター・ライブラリー・コオペレイションについては、アマーストの場合、図書館だけのことでなく、教育・研究全般にまで及ぶファイブ・カレッジ・コオペレイションというものがあって、その中で正式の相互協力ができ上がった。五大学のインター・ライブラリー・ローンもライブラリー・センターもその一環のものである。

これからアマースト大学のライブラリー・アドミニストレイションの実際と、アマースト大学を含む若干の図書館の相互協力について報告していきたい。

二、アマースト大学図書館

アマースト大学の現在の図書館はロバート・フロスト・ライブラリーと呼ばれているが、それはとく名の校友の寄付金により建設され、一九六五年オープンした。

その概要は次のようである。――

一、建物・設備等

地上三階、地下三層。各階約二、〇〇〇平方メートル。閲覧席約七〇〇、教員個室約六十。

一F (メイン) 管理・事務部門 (館長室および秘書室、オーダー部門、閲覧部門、整理部門、参考部門)、目録コーナー、参考コーナー、新聞雑誌コーナー、政府出版物コーナー、新着展示コーナー、文献複写コーナー、視聴覚室。

二F 開架書庫 (L C分類記号P―Z、デューイ分類記号一〇〇、四〇〇、八〇〇)、閲覧席、教員個室、グループ室、タイプライターの、男子洗面所、学内電話、水のみ栓。

三F 開架書庫 (デューイ分類記号三〇〇、九〇〇)、閲覧席、グループ室、タイプライター室、女子洗面所、水のみ栓、教員個室、学内電話。

地一 (Level A) 開架書庫 (L C分類記号A―N、デューイ分類記号〇〇〇、二〇〇、五〇〇、七〇〇)、特殊文庫、リザーブ・ブック、閲覧席、教員個室、職員休けい室、公衆電話、男子洗面所、水のみ栓。

地二 (Level B) 開架書庫 (製本雑誌、攻府

(表1)

	アマースト大	同志社大図書館	同志社大(全)
図書館経費 (図書費)	200,000千円 (53,500千円)	254,000千円 (35,500千円)	600,000千円 (184,000千円)
蔵書数 同年間増加	525,000冊 11,000冊	263,000冊 10,000冊	730,000冊 43,000冊
新聞・雑誌 同継続受入	1,650種 1,300種	2,250種 1,000種	13,000種 5,800種
職員数	44名	44名	80名
奉仕対象数 学生 教員 その他	1,500名 140名 5大学相互利用	20,000名	370名
開館時間 開講中, 月～金 開講中, 土 開講中, 日 休暇中	8:00～24:00 9:30～17:30 12:00～24:00 8:30～16:30	10:00～20:50 (10:00～11:50 18:00～20:50)	9:00～16:00 9:00～12:00
貸出期間 1ヵ月 更新可 延滞料: 10日・冊		院生 2週間 学部学生 1週間 延滞: 貸出停止	
分館(室)数	15	1	14

(以上の数値は概数、アマーストの金額は1ドル約290円で換算)

刊行物、デューイ分類記号六〇〇、視聴覚資料、地図室、文献複写コーナー、アマースト資料。
地三 (Level C) Ⅱ ハンプシャー・インター・ライブラリー・センター (HILC)。図書館経費、蔵書数等については図示した方がわかりやすいので、比較の便から、参

考までに本学の数値もつけて、左の表にまとめ。(表1)
二、予算
予算については機密であることを強く申し渡されていた。余りくわしくはきけなかったこともあって、項目とその内容および総額に対する百分比を記す。(表2)

- 人件費 Salaries
パート・タイム、フル・タイム、専門職、非専門職を問わず、いわゆる職員人件費。
 - アルバイト人件費 Student salaries
学生アルバイト料 \$2.25/h 又は \$2.50/h
 - その他 other expenses
一、equipment 一〇〇ドル以上の備品、二、supplies 文具雑品、三、telephone、四、travel
五、miscellaneous 寄贈図書評価者の謝礼、六、entertainment、七、photoduplicating machine、八、maintenance of equipment、九、inter-library loan service 他館文献複写代・ロイン代 \$8/冊、十、audiovisual フィルムの掃除、機器維持費、十一、NELINET: OCLC システムユーズ、カード代 \$57/item、十二、HILC、十三、図書費 books
 - リザーブ・ブック Duplicates for reserve
 - 一般経費 General expenses
四つの寮図書館経費
 - 分館(室)経費 Interdepartmental charges
 - 基金関係 Restricted Funds expenditure
特殊基金に伴う経費
- 予算の執行については、コンピュータ・センターより毎月、部門別予算使用報告が出され、月々の予算執行状況を把握し、

(表 2)

	1974/75	1975/76	1976/77	1977/78
人 件 費	57.08%	60.46%	61.25%	60.95%
アルバイト人件費	2.66	2.44	2.48	2.45
そ の 他	36.23	35.59	34.96	35.35
(内数) (H I L C)	(2.98)	(2.72)	(2.99)	(2.81)
(図 書 費)	(26.76)	(26.40)	(27.04)	(26.54)
リザーブ・ブック	0.86	0.79	0.77	0.72
一 般 経 費	0.21	0.32	0.23	0.22
基 金 関 係	2.71	—	—	—

前年度との比較もできる。

三、人事

職員の採用については、専門職 professional の採用と非専門職 non-professional のそれとに分かれる。

○専門職の採用

募集は広く募集するという点から、国レベルの新聞に発表することが義務づけられている。したがって、「New York Times」「Library Journal」など、おぞびローカル紙に求人広告をする。応募のバ切、サラリ、職種についての長文の説明、記述が要求される。

審査は、専門職六人、非専門職一人からなるスタッフ・サブ・コミティが面接し、面接記録をとる。それにより職能の有無や推せん等を勘案し、館長、教員、館員、学生よりなるサーチ・コミティが人数をしぼる。それからスタッフ・サブ・コミティに学長、副学長、教員代表を加え面接し、報告書をまとめ、サーチ・コミティへ提出する。サーチ・コミティはラテン語、フランス語、ドイツ語、スペイン語等、語学や目録についての経験や関心を審査し、優先順位

をつけ、三名ぐらいにしぼり、学長に推荐する。そして学長が決定する。

○非専門職の採用

応募書類を人事に提出し、図書館で面接し、Job Description と照合し決定する。

応募書類は、経歴、学歴、職歴、希望職種、保証人（紹介先）等の項目がある。Job Description とは、業務内容と要求される資格、経験知識、責任の度合い等を具体的に記したものである。面接の結果、採否およびサラリーが、この項目をどれだけ満たすかによって決まる。

なお、専門職の採用については、アメリカ図書館協会は各図書館にガイド・ラインをきめるよう要請している。アマースト大学の図書館長もその審議会のメンバーとして参画している。

○勤務評価

専門職に対する評価は年に一回学長あてに提出する。

非専門職については、勤務不良者には業務遂行上の知識、勤務状況（業務の質や量、業務の理解度、勤務態度などをチェックする。又、年一回勤務状態を洗いなおし、

Performance review report for staff appointeesを人事に提出する。

その他超過勤務、休暇等については、“Amherst College Staff Handbook”に記されているので省く。

四、業務計画

図書館の発展、図書業務のより合理的・円滑な執行のためにライブラリー・カウンシルが設けられている。蔵書の充実・発展のために、そのポリシーから、新聞雑誌のタイトルの増減、補充やウィーディング等々にいたるまでを、予算や五大学との関連から、教員からの助言をも得ながら、非専門職も交えて協議していくのである。定期的ではないが、問題ごとに会をもち、多くのスタッフに発言できるよう、Q and Aの時間も設け、記録をとり、スタッフ・ノートでそのつど発表し、全員に周知徹底をはかる。

スタッフの人事管理に関する事がらとしてスタッフに要求される資質・職能をも研究する。そして業務分担の適正化のために、館内での人事異動を行う。又、休暇や欠員にも対処できるように、主業務以外に

も通じ、業務互換性をもたせるようにとの配慮から、非専門職にもライブラリー・コースを体験させたりもする。

その他目録記述の標準化、図書館利用に関する利用者教育、未整理資料の目録化、分類のデューイ・システムからLCへの切り替え等図書館活動全体の細部にわたり問題を検討し、館としての方針を決めている。

ロバート・フロスト・ライブラリー全般については以上であるが、図書館業務の細部について若干の項目をあげて、述べる。

五、収書

選書は教員と館長が行う。購入推せんは各専攻分野別に割り当てられた予算の枠内で、分野ごとに所定の手続をへて、オーダー部門へ出される。その他特殊主題、ブック・スタディ等に関する分野の選書は一般の推せんも受け付けられる。以上の新規購入以外に欠本補充のための購入はサーキュレイションの責任者が行う。そこで専攻分野別の予算の割り当てが収書の方針をきめることになる。

これは前年の館外利用数、すなわち貸出

冊数をもって当年の購入を決定する、という考え方によってなされる。主題別貸出数に、その主題分野の図書平均価格を掛けたもの（ $\parallel$ コスト・ユーージ）から百分比を出し（ $\parallel$ パーセント・コスト・ユーージ）、それにもとづいて予算額をきめるというのである。この考え方と予算配分の方法について、館長も参考になっているので一読するようにとすめられた論文^{*}によれば、貸し出しイコール要求である、という。利用されるということは人々が望んでいるということである、と単純化して考える。（もちろん図書館が満たしていない、したがって貸し出しとしてカウントされない要求というものはあるが、それらは相対的なものであるという前提に立つのだが）そして利用の要求を示すものとしては、館内利用よりも館外貸し出し利用の方が頼れるし、学問研究の関心と、より大きい相関関係にある、という。

この主題の分け方は、大学図書館の蔵書はカリキュラムを反映していなければならぬ、という考えから専攻分野を基準とする。

この配当の方法 Use-Cost Percentage Allo-

actionで実際に予算配分するにあたり、アマースト大学では雑誌等継続物と前年度に発注済未納入分を差しひいた額を総額とし、対前年度比が一〇%以上の増又は減になるものについては便宜的に一〇%で抑えている。

六、目録および整理

目録は著者・書名・件名の辞書体目録である。

請求記号については一九七四年以前はデューイ十進分類法によるもので、それ以後はLC分類である。図書の所在を示すロケーション・シンボルもつけられている。八つの分館(室)六つの寮図書室、特別室、参考コーナー、閑架等が略号で示されている。新聞雑誌の目録も、誌名又は発行母体名(Journal, Proceedings, Bulletinと始まる場合)の下に目録がとられ、くり入れられている。

目録処理はOhio College Library Center (OCLC) の分担目録システムを利用している。ロシア語・日本語図書以外はOCLCのコンピュータにたくわえられている目録情報を利用する。すなわち、当該目録情

報のうち、必要事項だけを選択して、印刷されたカード目録の提供を受けるのである。

OCLCに目録情報が入っていないもの、ロシア語・日本語図書の処理は専門職のカタログガーが担当するが、OCLCから印刷されたカード目録の提供を受けるまでの作業は非専門職が行う。

このOCLCシステムを利用することにより、目録処理のスピード・アップ、専門職のカタログガーの人件費削減等目録作業の合理化が可能になった、と言われている。

七、サーキュレーション

開館時間については別表の通りであるが、アメリカの大学図書館は、正規期間中は週一〇〇時間前後、平日・日曜は夜十二時頃まで、というのが多い。(日曜日の開館は平日より遅い)アマースト周辺の五大学相互利用については次項で述べるが、その五大学の開館時間も、大体にたよりったりである。

貸し出しは、一般開架図書は一カ月(更新も可)、卒業論文を書くシニアの場合、関係図書は一学期間、どの図書も貸し出し後

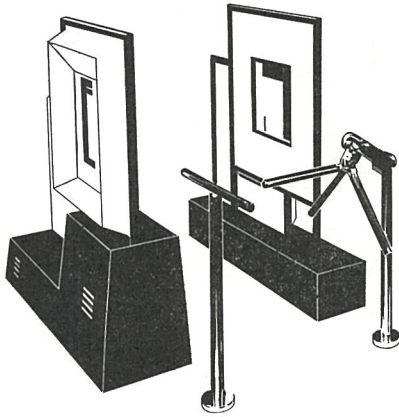
二週間以上を経過すれば、請求者の求めに応じて返却しなければならぬ。

返却については、厳格であるが、開館時も返却できるよう返却ボックスが設けられている。返却をとどこおらせた場合一日一冊につき一〇セントの罰金を課せられる。ただし、返却即時にその罰金を払う場合は、五セントに減額される。一カ月たっても延滞料未納の場合は、延滞通知が送られる。一カ月以上未返却図書は紛失と見なされる。紛失の場合は当該図書補てんのための額に手数料十五ドルを加えたものが課せられる。

開架で自由接架式がほとんどであるから、無断図書持ち出しを警戒して、多くの図書館は入館者の持ち物チェックにはきびしい。訪れた図書館は全部、出入口にチェック係をおいて退出者のカバンの中をチェックしていた。開館時間が長いから大変だろうと驚いた。学生数の少ないカレッジはもとより、二十八階建てで二万をこえる学生が利用する図書館(マサチューセッツ大学、ボストン大学)でも同じで、チェック・ポイントには退出者が長い列をつくっていると

ころもあった。しかし、アマースト大学だけは、チェック・システムは機械化されていた。

それはノゴ社の盗難防止装置 KZOGO Mark II Anti-Pilferage System によるものであった。図書には、背かあるいは余白に磁気リボン（厚さ〇・二五ミリ、一七・八センチメートル×三・三ミリメートル）が貼付されている。そしてサーキュレーション・デスクのそばの通路は入口と出口に分けられ、出口通路にはパネルが装置され、その磁気リ



チェック・システム

ボンのついた図書がそこを通過すると警報が鳴り、出口の回転木戸がロックされて出れなくなる。

その磁気リボンの感度を強めたり弱めたりする装置があり、貸し出し手続きが済めばその装置によって感度が弱められるのでパネルの横を通過しても警報は鳴らない。そして返却時に再びその装置により磁気を強めてから配架する、という仕掛けである。

三、ファイブ・カレッジ・コオペレイション

一、インター・ライブラリー・ローン

アマースト、マウント・ホリオーク、ハンプシャー、マサチューセッツ、スミスの五大学の共同体制は、非公式にはハンプシャー大学がまだ創設されていない一九三〇年代の学生、教員の交換に始まる。さらに言うならば、マウント・ホリオーク、スミス、マサチューセッツ農科大学（今のマサチューセッツ州立大学）の創設にも、アマースト大学はあずかることがあった。そして四大学の委員会は地区の第五番目の大学を建議し、結果として一九六五年にハンプ

シャー大学が創立されるにいたった。五大学における教育研究・文化・社会活動は五大学の全メンバーに開放されるようになった。学生の場合、他の大学のコースを受講することもできるし、昼食も、又正当な理由のある場合、朝・夕食もとることができ。他の大学へ行く交通手段として、ファイブ・カレッジ・バスが三十分一回ぐらいの割合いで運行されている。

五大学の図書館の相互協力は、一九五一年ハンプシャー・インター・ライブラリー・センター（HILC）の創設とともに始まった。

学生・教員は身分証明書を提示するだけで他の図書館を利用できる。ファイブ・カレッジ・バスを利用して出歩いて行ってもいいし、自館を通じて申し込み、毎日午前・午後二回のメッセンジャー・サービスを利用することもできる。ただし、返却は自館を通じてする。そして利用者は利用する図書館の規程にしたがう。

目録は五大学のユニオン・カタログは無いが、新聞・雑誌・逐次刊行物については、五大学とハンプシャー・インター・ラ

イブラリー・センター、およびそれに加盟しているフォーズ公共図書館所蔵の目録をコンピュータ編集した冊子目録 Pioneer Valley Union List of Journal and Serial Holdings がある。

このパイオニア・ヴァレイ地区の五大学の図書館の蔵書数合計は二八〇万をこえる（一九七五年七月）。これは単一図書館とみなせば、オハイオ州立大学やプリンストン大学にはば匹敵する。そして、年間増加数は一一万、さらに逐次刊行物の受け入れタイトルは二万五千種におよぶ。

二、ハンプシャー・インター・ライブラリー・センター Hampshire Inter-Library Center (HILC)

HILCは重要ではあるが、利用は少なく、一館だけでは経費的にも入手・所蔵に不適當な研究資料を共同で受け入れ保管するために、一九五一年ハンプシャー地区の名をとって創設され、現在はロバート・フロスト・ライブラリーのレベルC（地下三階）にある。

加盟館はアマースト大学、ハンプシャー大学、マウント・ホリオーク大学、スミス

大学、マサチューセッツ大学とフォーズ公共図書館である。

受け入れる資料は、主に重要ではあるが専門的で利用の少ないセット物および逐次刊行物に限られる。そして所蔵資料は寄贈又は購入によるものか、加盟館より移管されるもので構成される。逐次刊行物が主であるから、その新規受け入れについては嚴格で、たとえ推せんがあったものでも、ハンプシャー地区のどこにもないタイトルに限られる。

そしてどこか一館で継続されてきたタイトルをHILCが肩代わりすることはなく、研究上必要とする機関が行う。利用頻度については、各大学長・館長・教員で構成されるボード・オブ・ディレクターズに報告され、きびしくチェックされる。

センターの書庫は閉架である。資料のセンター内での利用は自由であるが、貸し出しは教員、院生は直接借ることができるが、学部学生は自館を通さねばならない。貸し出し期間は四週間。

目録は、HILCの図書資料のものが加盟館の閲覧用目録にくりこまれ、HILC

のロケーション・シンボルがふられているので、加盟各館で検索できる。逐次刊行物については、ファイブ・カレッジのものと同様 Pioneer Valley Union List of Journal and Serial Holdings に収録されている。かくて、資料の分担所蔵と相互利用は、ハンプシャー地区という一ローカル区域内ではあるが、利用できる資料をふやし、コストをさげるための相互協力がなされているのである。

HILCはこの五大学地区の資料の受け入れ、利用、保管の分担に役立ってきたのであるが、コストの点から最近そのあり方をめぐって再検討されている。コンサルタントを呼び、HILCの現状を洗い直させ、そのレポートが最近出された。それによるとマサチューセッツ大学のような大規模研究図書館や実験的教育を試み、オーディオ・ヴィジュアル資料を優先するハンプシャー大学が加盟するようになり、HILCも質的に変化してきている。そしてミッドウエストのセンター・フォア・リサーチ・ライブラリーズ(CRL)のペリオディカル・バンクにより雑誌の負担も軽減できるよう

になった。エレクトロニクス、特にT W X (テレタイプ網)の発達により、利用が迅速、正確にできるようになった。あるいは又、当初あつた政府と慈善団体の二つの助成金がなくなつた、等々の状況の変化がある。そして受け入れ、保管の分担により各館の重複を少なくしていこうとは言つても、リベラル・アーツの大学では重複は必ずしも悪くはない。それなのにH I L C のための各大学の負担は一万ドルにもなり、年々増加していくばかりである。というのがH I L C の現状分析の骨子である。

といつても図書館相互協力のうち、受け入れ、保管の分野を必要だと言つことにほならない。この場合は、コストの点から、ローカル規模のH I L C にその機能を果たさせることが問われているのである。

四、目録分担システム (O C L C)

O C L C とはオハイオ大学図書館センター Ohio College Library Center の略であるが、オハイオ州立大学そのものとは直接関係はない。

戦後の新教育計画実践のため、オハイオ大学協会が創立された。そして州内の研究資料のより効果的な利用のため、大学協会とオハイオ図書館協会大学部会とが図書館相互利用について研究を重ね、オハイオ大学協会にO C L C の設立を建議した。その結果一九六七年コンバースに創設された。センターはオハイオ州内の大学図書館が会員となり、その分担金で維持されることになった。その後学校図書館、公共図書館も加盟することとなる。最初はL C のM A R C をコンピュータに入力、目録カードを作つて会員機関に郵送するだけであつたが、一九七三年オハイオ州外にもオン・ライン・サービスを始めるようになった。

これは簡単に言えば、O C L C のコンピュータにたくわえられてある書誌情報を利用館の端末機からスクリーンに呼び出し、必要な追別変更をキーをたたいて送りかえし、その印刷カードの提供を受ける、というシステムである。

さらに言えば、入手して受け入れる図書資料について書誌情報がすでにO C L C のデータ・ファイルにあるかないかを、キーをたた

いて探す。そのサーチ・キーは著者・書名キーか、書名キーかである。著者・書名キーは著者記入の最初の三文字と書名の最初の三文字の組み合わせであり、書名キーは書名の最初の六文字である。例えばAgency Training Centers for Governmental Employees という本の場合、著者記入はU. S. Civil Service Commission. Bureau of Training. Division of Centers. であるが、著者記入全部を知っている利用者というのはめつたにないが、O C L C システムでは、“US, AGE”というサーチ・キーだけでよい。

データ・ファイルに求めるものがあれば、スクリーンに著者・書名・版表示・出版事項・対照事項・分類記号等があらわれる。それと図書そのものとを比較し、各事項が同一であればそのカードを発注する。同一が確認されても、部分的に異なる点があれば、当該事項を打ちかえ、館によつては目録記述の粗い、こまかい、があるので、必要なものはけずり、カードを発注すればよい。これは、登録され、番号が割り当てられているオペレーターならだれでもできる。アマーストの図書館でも非専門職がこれに当たっていた。

これだけであれば利用館は目録作成のための情報を受けるだけである。

キーをたたいて必要な目録情報を求めても、OCLCのデータ・ファイルにない場合、定められた様式、ワーク・シートにしたがってデータを打ちこむ。この作業も非専門職でできる。図書資料から書誌事項を正確にゆみとって、ワーク・シートに記述するのは、カタログの専門職が担当しなければならないだろう。この打ち込まれたデータがOCLCのデータとなり、以後その資料を入手した館はそのデータを利用して目録カードの提供を受けることになる。OCLCのデータ・ファイルに入っている記録は、議会図書館LCのMARC IIの情報と、このように加盟館が新しい資料について入力したものである。

これが目録分担システム shared cataloging systemと言われるゆえんである。OCLCの加盟館の目録処理に関しては、一つの資料について最初に受け入れた一館が目録をとるだけでよいのであるから、これは目録分担そのものであり、それによる単位コストの削減、目録処理に要する時間の短縮などに大変

役だっているのである。一館だけのコンピュータ化ではこうはいかない。

このオン・ラインの分担目録はOCLCの最大の機能であるが、データ・ファイルには資料の所蔵館名も記録されているので、所蔵のユニオン・リストにも使え、相互貸借にも利用できる。その他に逐次刊行物管理システム、受け入れシステム、遠隔目録検索等々も設計されているという。

五、ナショナル・レンディング・

ライブラリー

HILCがアマースト大学を含む五大学の資料の分担所蔵の役割を果たしてきたことについてはすでに述べた。しかしこれはパイオニア・ヴァレイ地区というローカルのものでしかなかった。図書館相互協力は協力館のコストの削減ないしは増加の抑制から発想されているから、コストがふえてくると、HILCも洗いなおしをせざるを得なくなってきた。相互協力は身近なところから始められ、いずれはより広域の、最終的には全国レベルのものが求められてくるであろう。エレクトロニクスの発達で何千マイル先の資料利用も

可能にならんとしているのに、どうしてわずか半径十マイルぐらいの範囲で維持しようというのか？ 目録も保管も同じように全国レベルで安く協力できるではないか？ という訳である。そのための一つの具体的な構想が、ナショナル・レンディング・ライブラリーである。

ナショナル・レンディング・ライブラリーについては、すでに検討委員会でもでき、検討がすすんでいる。このセンターの下に地域センター（例えば、東部地域センター。すでにこの東部地域センターにみずから名のり出ている館もあるらしい）を設けることになる。

それが実現すれば、アマーストの場合、所蔵していない資料については、パイオニア・ヴァレイ地区で求め、さらに東部地域センターで探し、そして最後はナショナル・レンディング・ライブラリーに求めることができる。

現在のところ、Center for Research Libraries (CRL) があり、加盟機関にとってはデジタル・ライブラリーとしての機能を果たしている。CRLは大学院課程をもつ正会員と、それ以外の準会員とからなり、蔵書四〇

〇万をこえる、ミッド・ウエストの大研究センターである。ハーバードもイェールも加盟している。ナショナル・レンディング・ライブラリーが実現すると、このCRLはそれに吸収されることになるらしい。そうするとL Cの方は目録処理を一手にひきうけるプロセシング・ライブラリーとして機能することになるのではないか、とも言われている。

小はローカル・レベルのファイブ・カレッジ・コオペレイションやHILC、大はCRL、そしてハーバード、イェール、コロンビア、ニューヨーク市立公共図書館の四大研究図書館が形成している連合体 *consortium*——主に利用頻度の小さい逐次刊行物の一点保有をしている——等様々な相互協力を試みている。ナショナル・レンディング・ライブラリーもそういったものがあつてはじめて実現の兆しがみえてきたのである。広大なアメリカで、急に全国レベルのものが発想され、実現する訳はないのである。

図書館資料の効果の利用への熱い思い、コスト効果への強烈な志向が、大学間、図書館間のライバル意識、図書館人のプロフェSSIONナル・プライドをものりこえて、図書館相

互協力を可能とし、ナショナル・レンディング・ライブラリーを現実とせつづつあると言えるのではないだろうか。

六、おわりに

以上、十週間ほどの研修旅行で得たものを、細部は省き、アマースト大学図書館の実際とアメリカの図書館相互協力について、舌たらずながら述べてきた。

日本の図書館や同志社大学の図書館行政について何も感ずるところがないと言えは嘘になる。ほう大な製本費と手数をかけ、書架とスペースを占める重複雑誌のバック・ファイルの保管とその利用ぐらいいはすぐにも思いつく事からである。図書館間相互協力とまではいかななくても、学部間相互協力を含めた学内の図書館行政については、しかるべき検討が必要であることを期待したい。

アマースト大学およびその他の大学図書館で各種の資料を頂いた。このレポートを作製するに当たって、記憶は日々うすれていくので、あらためて参考にした。よい復習になった。

参考資料をリスト・アップしておく。希望

の向きはお申し出くだない。

(大学経済学部研究室係長)

〈参考資料〉

〇アマースト大学図書館関係

* A Pragmatic Book Allocation Formula for Academic and Public Libraries with a Test for Its Effectiveness, (extracted from *Library Resources & Technical Services*, Fall 1975, v. 19 no. 4)

**A View of HILC and Its Future.

The Hampshire Inter-Library Center: A Survey of Its Background and Its Problems with Recommendation for the Future, by Keyes D. Metcalf. (South Hadley, The HILC, 1957.)

A Guide to the Hampshire Inter-Library Center. (1968)

Five College Library Guide, 1976-1977. (The Five College Coordinator, 1977)

Amherst College Library Handbook. (The Friends of the Amherst College Library.)

A Report on the Amherst College Library, by Willis E. Bridgeam, Jr. [Librarian of the College]

Circulation Work. (extracted from *The Administration of the College Library*, by

Guy R. Lyle. 4th ed. The N. W. Wilson C., 1974)

Reference Service. (—ditto—)

Ohio College Library Center. — On-line

Cataloging. (The Ohio State University

Libraries Office of Educational Service,

1973)

Ohio College Library Center. — Design of

Formats and Packs of Catalog Cards. (—

ditto—)

○その他アーボースト大学関係資料 (キートン

部長より大学当局へ送られたものである)

Amherst College Staff Handbook. 他10数点

○五大図書館関係資料の他

Guide to the William Allan Neilson Li-

brary. (Smith College)

A Self-guided Tour of the William Allan

Neilson Library. (Smith College Library)

Library Guide. (University of Massachu-

setts)

Enchiridion. (Hampshire College, Harold F.

Johnson Library Center)

Basic Library Resources. (—ditto—)

Library Handbook. (Wesleyan University)

The Yale University Library Guide.

Report of the University Librarian. July

1975-June 1976. (Bulletin of Yale Univer-

sity, Series 73, no. 1)

Harvard Law School Library Users' Guide

1976/77. (Guides to the Harvard Libra-

ries, no. 6)

Harvard Law School Catalog 1976/77.

Avram, Henriette D., — MARC, Its History

and Implications. (Library of Congress,

1975)

Information on the MARC System. (Library

of Congress, MARC Development Office,

1974)

Cataloging Service Bulletin, no. 120. (Lib-

rary of Congress, Processing Department,

1977)

The New York Public Library, Report 1974

/75.



アカデミア賞を受賞された

岩倉具実元大学文学部教授

一九四六(昭和二十一年)年から二十一年間にわたり、同志社大学文学部教授として、言語学、西洋古典語、ドイツ語を担当された岩倉具実元教授は、「多年言語学の研究と日本語教育に尽くせる業績」の故に、一九七六(昭和五十二年)年度の社団法人全国日本学士会アカデミア賞を受賞された。巻頭写真は、昨年七月二十八日、京都ミヤコホテルにおける授賞式で、全国日本学士会の松前理事長(東海大学総長)から表彰される岩倉具実氏。

なお、このアカデミア賞は、わが国の学術・教育・文化産業等の分野に著しく貢献をされた方々に与えられるもので、その功績を讃え、永く後世に名をとどめられることとなる。